

-鹿角観光いろはカルタ十和田版題材地を知る-

代表者 1B 勝 又 麗 慧
指導者 岩 谷 宣 行

はじめに

本校におけるふるさと教育事業は今年度で4年目となった。従前は3学年を縦割りにし、学年の枠を越えた学びあい、教えあいの姿がみられた。その中であって、研究を進めるにあたっては高学年の生徒が中心となる状況であり、特に高校生活をスタートしたばかりの1年生の「主体性」をどのように確保するかという点で課題が生じてきていた。この課題の解決のために、今年度は1年生全員を「研究の基礎」領域の所属とした。内容としては以下の構成とした。

①鹿角を知る－講話をとおして－

②地域活動を体験する

- ・毛馬内盆踊り
- ・かづの元気フェスタ
- ・鹿角観光いろはカルタ十和田版題材地を巡る

③情報を伝える－発表の効果的な行い方－

上記のプログラムによって2年次以降の主体的な学びへと接続させ、①ふるさとの素晴らしさの発見、②ふるさとへの愛着心の醸成、③ふるさとに生きる意欲の喚起、④ふるさとについて発信する力の育成、の本校ふるさと教育「かづの学」が掲げる4目標の達成を図りたい。

I テーマ設定の理由

本校は鹿角市十和田毛馬内に位置している。当地は1972（昭和47）年の鹿角市誕生以前は「鹿角郡十和田町」であり、現在の鹿角市立立山文庫継承十和田図書館に町役場があった。また、十和田町は毛馬内町、大湯町、錦木村と小坂町の一部からなっていた。この旧十和田町エリアからなる鹿角市十和田地区には、数々の史跡・名称や伝統芸能、伝説、産業として大きな存在であった鉱山、地形特性を生かした果樹栽培、古くから保養地として知られていた大湯温泉など、実に豊富な地域資源に恵まれている。

これら地域資源を後世に伝えるべく、2012（平成24）年に十和田地域づくり協議会によって制作されたのが「鹿角観光いろはカルタ十和田版」である。十和田地域づくり協議会では、カルタ

の完成後は「市民のチカラ事業」として題材地を巡る「鹿角観光いろはカルタバスツアー」を開催している。10月7日（土）、一般参加者及び案内人、市民センター職員ら17名とともに1年生20名がツアーに参加し、ふるさとの素晴らしさを体感した。

II 訪問したカルタ題材地

今回のツアーで訪問した題材地は以下のとおりである。なお、参加生徒が詳細について伝えたいとした伝説については、その概要を紹介する。

れ 歴史ある 石段つづく 月山神社

坂上田村麻呂が蝦夷平定について祈願したと伝えられる古い神社で、藩主及び地域住民の信仰が深かった。1925（大正14）年には、鹿角地区唯一、神社の格としては高い「県社」に指定されている。本殿は1735（享保20）年まで四度の山火事に遭っている。現在の本殿は1740（元文5）年に建立されたものである。なお、写真1の奥にあるのが本殿で、本殿を覆うように鞘堂（さやどう）がある。鞘堂は1848（嘉永元）年に建立され、以降風雪から保護されるようになった。



写真1 月山神社鞘堂内部の様子

ま 政子姫 悲しい伝説 錦木塚

千数百年前、錦木付近を都から来た狭名大夫（さなのきみ）が治めていた。八代目の狭名大海（さなのおおみ）には、政子姫という美しい

娘がいた。姫は狭布（京）の細布を織るのがとても上手だった。そのころ、草木の里に錦木を売るのが仕事になっている若者がいた。「錦木」は「仲人木（なこうどき）」とも言って縁組に使うものであり、当時は、男性が好きな女性の家の前に錦木を置き、その錦木を女性が拾って家の中に入れた場合は、結婚してもよいという意味の決まりがあった。ある日、若者は政子姫を見て好きになってしまった。毎日男は姫の門の前へ錦木を立てた。女の家の前へ錦木を置き、それを家の中へ取り入れられると嫁に行っても良いという印とされていた。若者は雨の降る日も風の吹く日も、雪の降る日も1日も休まず錦木を立てたが、錦木は1回も中へ入れられず、3年もの間増えるばかりだった。政子姫は機織りの手を休めて男の姿を見るうちに、若者が好きになっていた。しかし身分が違いすぎることと、また次のような理由から結婚はできなかった。

五ノ宮嶽の頂上に大ワシが巣を作り、飛んできては子供たちをさらっていた。あるとき、若い夫婦が我が子を失って泣いていると、みすぼらしい旅の僧がそれを聞いて、鳥の羽をまぜた布を織って着せれば、ワシは子どもをさらえなくなると教えてくれた。そういう布は、よほど機織りが上手でないと作れない。そこで政子姫は皆から頼まれ、親の悲しみを自分のように思い、3年3月のあいだ観音に願をかけ身を清めて布を織っていたのである。そのため、嫁に行くという約束はできなかったのである。若者は事情を知らずに毎日錦木を立てていたが、あと一束で千束になるという日、体が弱っていたため門の前に降りつもった雪の中に倒れて死んでしまった。姫もその2、3日後、あとを追うように死んだ。姫の父は2人をたいそう哀れに思い、千束の錦木と一緒に一つの墓へ夫婦として葬った。その墓が錦木塚である。

た 田道將軍の 歴史がたくさん 猿賀神社

1600年ほど前の仁徳天皇のころ、蝦夷征伐のために田道（たみち）將軍が都から鹿角へ攻めて来た。田道將軍は、米代川をさかのぼり、石野という場所に上陸した。戦が始まると、当初は田道將軍の方が優勢であったが、兵力も足りず劣勢となり、田道將軍は蝦夷の射った毒矢に当たって倒れた。そして死ぬ前に「おれが死んでも死体はかならず大蛇に化け、毒を吐いて蝦夷を滅ぼしてやる」と言ったという。將軍の死後は墓が建てられ、神社も建てられたが、その神社はいつしか「猿賀さま」と呼ばれるように

なった。ある時、いたづらな若者が猿賀さまの墓石を掘ってみたら、ほんとうに大蛇が出て、若者は大蛇に噛まれて死んでしまったそうである。

さ 佐多六に 巻物とどけた 忠犬シロ

佐多六の先祖は、全国どこでも自由に狩りができる『子孫永久又鬼免状』を拝領し代々相伝している家柄だった。ある2月の晴れた日、四角岳からカモシカを追い、三戸領境の来満峠でカモシカを追い詰めたが、三戸マタギ 5人衆に獲物を横取りされたあげく、他領内で猟をしたとの嫌疑で捕えられ三戸城へ連行された。佐多六は、大切な免状を家に忘れていた。シロは三戸～草木を往復し、2回目は佐多六が教えた仏壇の前で吠えて、妻がやっと免状に気付き、シロに託した。夜通し2往復目のシロが来満峠を越え三戸城に着いたときには、佐多六は処刑された後だった。シロは三戸城の見える丘から幾日も幾夜も、恨みの遠吠えを続け、そこは「犬吠森(809m)」と呼ばれるようになった。

り 竜になった 草木の青年 八郎太郎



写真2 八郎太郎出生の地(草木)

<そのほかの訪問先>

- し 縄文の 風を感じる ストーンサークル
- も 門杉よ オレも生きたい 2000年(大圓寺)
- あ あきになり 鹿角を彩る りんごの実
- こ 校歌にも 語り継がれる 内藤湖南

IV おわりに

鹿角市十和田地区の名所を巡りつつ、大湯ストーンサークル館では八郎太郎伝説にちなんだイワナを食し、果樹園ではリンゴのもぎ取りも体験することができた。また、1月には新春カルタ大会に出場及びスタッフとしてする予定である。地域を知ると同時に、地域を盛り上げようとする活動に参加することで、「地域」とは何かを考える機会になった。次のステップとして、2年次は主体的な研究を進めていきたい。